P-4-29

A病院における院内認定看護師制度の現状

岡山赤十字病院　看護部

○佐々木雅美、牧原百合子、中川　史子

【はじめに】平成20年より看護の質の向上の取り組みとして、院内認定看護師（以下キャリアナースとする）の育成を開始した。キャリアナースは認定看護師が活動する分野で育成し、2年毎の更新で現在3分野12名となっている。開始から10年を経過したので、現状を報告する。【目的】キャリアナースと認定看護師から見たキャリアナースの「活動状況」と「思い」を確認する。【方法】認定看護師とキャリアナースに、「活動の状況」「思い」に関するアンケートを作成し結果を分析した。【結果】認定・更新の現状：平成30年度までキャリアナースは6分野延べ22名。更新が必要だったキャリアナース12名のうち、更新したのは3分野4名（33.3%）であった。アンケート結果：キャリアナースは、「自己研鑽、キャリアアップ」「認定看護師や管理者からの支援」の平均値が順に高かった。認定看護師は、「部署でのOJTの指導者」「看護モデルになることができている」の平均値が順に高く、「キャリアナースへの介入」「看護管理者からの支援」は低値だったが、キャリアナースの育成を95%が必要と答えていた。「看護部での教育計画への協力」は、認定看護師、キャリアナース共に平均値は最も低値だった。自由記載では、「認知度の低さ」「モチベーションを維持していくことの困難さ」「更新への不安」が多かった。【考察】分野数・人数は約半数に減少したが、キャリアナースは意欲的に活動していた。活動への「支援」は、認定看護師とキャリアナースの思いに差があり、認定看護師は自らの支援だけでなく管理者からの支援に課題を感じていた。看護部としてキャリアナースを必要とする分野の提案、育成・支援方法を見直し、活動の承認と更新しやすい環境作りが求められていた。【今後の課題】育成・支援の在り方を見直し、キャリアナース規定を改定する。

P-4-30

臨床看護経験年数ごとに抱える看護研究に対する意欲と困難さ

三原赤十字病院　看護部

○安岡　恵、元永　望

【はじめに】研究に取り組む臨床看護師達は，それぞれ仕事の役割や生活背景が異なるため，研究に対して抱える看護師の負担も異なってくる。私たちは，臨床経験年数ごとに抱える看護研究に対する意欲と困難さを明らかにすることで，より個別に寄り添った適切な研究支援が期待できるのではないかと考えた。【目的】A病院に勤務する看護師の生活背景や役割と研究に対する意識と困難さの関係を検討することで，臨床経験年数ごとの研究に対する意欲と，活動を困難にしている要因を明らかにする。【対象と方法】A病院に勤務する研究の経験がある看護師74名を対象として，2018年8月～10月にかけて無記名自記式質問用紙によるアンケート調査を実施した。回収した質問結果は，数値化して集計した後，看護師経験年数の平均値未満のスタッフ看護師（37名）；平均年齢33.3歳，看護師経験年数9.4年と、平均値以上のベテラン看護師（37名）；50.1歳，看護師経験年数26.6年に分類し，この2群間の研究に対する意欲，研究活動を困難にする要因の相関関係について統計分析を行った。有意水準は5%とした。本研究はA病院の医療倫理委員会の承認を得て実施した。【結果】本研究により研究を行う臨床看護師たちは看護研究の必要性を最も感じながらも，研究をやりたくないことがわかった。スタッフ看護師はベテラン看護師より研究終了後の開放感が強く，ベテラン看護師はスタッフ看護師より自己学習の時間不足，図書文献の少なさ，共同研究者との時間調整を困難に感じていた。【考察】看護師は研究の必要性を感じる一方で，研究への意欲が低く，研究終了後の開放感や疲労感が高かった。看護師の経験年数によって異なる負担を理解し，環境改善を行なうことができれば，探究心をもち能動的に研究を取り組むことが期待できる。

P-4-31

日本赤十字専門看護師会会員の活動分析

日本赤十字社医療センター　日本赤十字広尾訪問看護ステーション

○関根　光枝

日本赤十字専門看護師会は、赤十字の施設等における高度看護実践とケアの質の維持向上及びその発展に寄与することを目的に活動している。2018年度の会員専門看護師（以下、CNS）の活動の現状を報告する。【目的】CNSの活動の現状を明らかにすること。【方法】同意が得られたCNS32名の2018年度活動報告内容4項目について単純集計し、活動内容については記述から抽出した。【倫理的配慮】活動報告の提出をもって研究参加の同意が得られたものとし、個人が特定されないようにまとめた。【結果】1. CNS経験：5年未満12名（37.5%）、5～10年未満16名（50.0%）、10年以上4名（12.5%）
2. 職位：看護師長8名（25.0%）、看護係長5名（15.6%）、看護主任6名（18.8%）看護師・助産師13名（40.6%）3. 管理業務の有無と勤務形態：管理業務有13名（37.5%）、無19名（62.5%）、管理業務が有る13名の内、管理夜勤有6名（46.2%）、無7名（53.8%）、管理業務が無い19名の内、交代制勤務有9名（47.4%）、無10名（52.6%）4. 活動時間：全就業時間19名（59.3%）、週数日6名（18.8%）、月数日2名（6.3%）、活動日なし4名（12.5%）、その他1名（3.1%）5. 活動内容：患者家族の重要な意思決定支援や組織横断的な医療チーム、診療報酬算定につながる活動、課題解決に向けた体制やマニュアル整備、倫理や研究に関わる委員会等での活動、他職種も対象とした教育活動やコンサルテーションを行っていた。院外活動では、他施設や教育機関における教育活動の他に、行政等他機関と協働した活動なども行っていた。【考察】組織横断的な活動でチーム医療を推進し、様々な診療報酬算定につながる活動を通して組織経営にも貢献している。また、他職種も含む教育活動やコンサルテーションによって、医療全体の質向上に向けて役割を発揮している。院外活動では教育活動以外に活動の幅を広げている。

P-4-32

赤十字医療施設に勤務する認定看護師の組織・師長から受けている支援の実態

旭川赤十字病院　看護部

○長谷川浩美

【背景・目的】認定看護師制度発足から20年以上が経過し、認定看護師が質の高いケアを提供するためには組織・師長からの支援が重要と報告されている。認定看護師が看護の専門性を発揮できる職場環境をつくるうえで、組織・師長から受けている支援の実態を調査した。【方法】赤十字医療施設において、協力が得られた60病院に勤務する認定看護師610名を対象に基本属性、組織・師長から受けている支援の頻度について調査した。データ分析は基本統計量を算出した。【倫理的配慮】本研究は日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。【結果・考察】認定看護師252名（有効回答率41.3%）から回答を得た。対象者の基本属性では最終学歴は看護専門学校3年過程184名（85.6%）、職位は係長112名（44.8%）、業務形態は兼務144名（58.5%）がそれぞれ多い結果となった。また、平均年齢43.5歳（SD5.8）、看護師経験年数平均21.2年（SD5.7）、認定看護師経験年数平均6.5年（SD3.5）であった。組織からの支援では「組織の中に認定看護師の委員をつくってくれた」「活動を承認してくれた」等13項目、師長からの支援では「研修参加のための機会を与えてくれた」「学会、研修会参加のための休暇取得の配慮をしてくれた」等4項目で高頻度な支援を受けている結果であった。認定看護師の支援には資格やその能力を見極め、活動を考慮した体制づくり、活動時間の確保等、システム構築が必要であると考える。一方、師長からの支援の中で「研究時間を確保してくれた」「研究指導をしてくれた」が特に支援の低い結果であったことから、認定看護師は師長には研究活動への支援を期待していると考える。

P-4-33

救急看護認定看護師の病棟支援

長浜赤十字病院　看護部

○野上　幸代

『目的』救急看護認定看護師（以下、認定看護師）の役割として、全病棟の患者家族のクリティカルケア領域に関する相談対応を行っている。今回、呼吸ケア介入を依頼され、食事摂取し退院できた事例をもとに認定看護師としての支援を振り返ったので、その結果を報告する。『方法』毎月、認定看護師の活動日と相談内容をイントラネットで知らせる。病棟で相談事例が発生したら、所属長より連絡があり、対応する日時を決定する。『結果』事例：消化器内科病棟より90歳女性イレウス疑いにて入院中、入院1ヶ月後に酸素化不良にて介入の依頼患者は「御飯が食べたい」と言われており、家族も同様に願っていた。呼吸音は右側呼吸音減弱し、右側胸部から背面にかけて捻髪音が聴取していた。患者とスタッフとともにケア計画立案をした。1週間後に食事摂取を開始し、3週間後に軽快退院した。介入回数は3回であった。1回目は呼吸状態をスタッフとともに病態のアセスメントを行った。必要な呼吸ケアを考え、看護計画に追加した。また、ADLの低下がみられたため、リハビリの介入を依頼した。2回目は呼吸ケアの継続の有無と実施していく中で困ったことやトラブルについて確認した。そして、理学療法士とともにADLの状況を確認し、離床を進めた。3回目は食事開始となり、誤嚥予防についてケアの統一を図った。スタッフがフィジカルアセスメントにて食事摂取のタイミングを判断し、食事摂取を進めることができた。『おわりに』病棟からの依頼で、認定看護師の役割を意識しながら、スタッフとともに実践することを心掛けている。その中でスタッフの気づきとケアが継続できていることとを承認し、患者の変化を伝え、看護の楽しさを実感できるように支援した。その結果、患者もよい方向に向かわれ、スタッフも看護に自信が持てるようになった。

P-4-34

X線TVによる散乱線防護クロスの有用性

八戸赤十字病院　放射線技術課

○根城　昂尚

●背景　医療現場では、その有用性から、多岐の検査にわたりX線透視検査が用いられている。X線透視検査はリアルタイムに動画として観察することができるため、診断などの点で重要な役割を担っている。当院では、X線TV装置でMDL、DDL、PTCD、ERCPなどの検査を実施している。中でも、ERCPは年間250～300件のペースで実施されている。ERCPは検査時間が長くなることが多く、術者、介助者は散乱線による被ばくを他検査よりも受けているものと推測できる。そのため、検査中は鉛エプロンや鉛板、個人線量計による測定を行うことで、被ばくの低減に努める必要がある。当院では、このERCP時に限り、Drの指示にて、管球に吊り下げる特殊な散乱線防護クロスを使用している。●目的　当院でERCPを実施しているTOSHIBA製X線TV装置で、散乱線の線量測定を行い、散乱線防護クロスの性能と有用性を検証する。●方法　ERCP時の再現のため、水ファントムを管球下に置き、その上から管球ごと散乱線防護クロスで水ファントムを覆い、術者、介助者の立ち位置での線量測定を、クロス使用時・未使用時でそれぞれ行う。また、さまざまな透視条件で散乱線量の変化を測定する。測定値から散乱線の低減率を算出し、散乱線被ばくに対する散乱線防護クロスの有用性を調べる。●結果　それぞれの透視条件での測定で、高い低減率を示す結果となった。特に被ばく量が多くなってしまう術者への散乱線防護の有用性は多大であった。●結論　現在、X線透視検査を行う上で、職業被ばくは切っても切れない問題である。ERCP限定ではあるが、今回の散乱線防護クロスの有用性の結果の高さが、術者と介助者の被ばく低減に対する安心感に繋がり、結果として検査の質の向上に寄与していくと考えている。